

天問成書考

著者	上島 一夫
雑誌名	漢文學會々報
巻	9
ページ	25-31
発行年	1939-03-25
URL	http://doi.org/10.15068/00146894

天問成書考

上 島 一 夫

天問は楚辭文學中にありて、其の文義の次序し易からず其の内容の晦澁にして通じ難き點に於て一異彩を放てるものにして、古來の註釋書爲に悉く之が解明に苦しみ遂に能く其の本義を闡明したるものあらず。彼の「楚辭章句」の著者たる王逸すら「天問敍」に「天問以其文義不次、又多奇怪之事、自太史公口論道之、多所不逮。至於劉向・楊雄、援引傳記、以解說之、亦不能詳悉、所闕者衆、日無聞焉。既有解詞。乃復多連鑿其文、濫頌其說、故厥義不昭、微指不慚。自游覽者、靡不苦之、而不能照也。」といひて、這般の消息を洩らしつゝ、自らも亦後人を承服せしむるの見解を示すに到らざりき。而も、彼は又「天問者屈原之所作也。……屈原放逐、憂心愁悴、彷徨山澤、經歷陵陸、嗟號旻昊、仰天歎息、見楚有先王之廟及公卿祠堂、圖畫天地山川神靈琦瑋僞佞、及古賢聖怪物行事、周流罷倦、休息其下、仰見圖畫、因書其壁、呵而問之、以渫憤懣、舒瀉愁思。楚人哀惜屈原、因共論述。故其文義不次序云爾。」と云ひて、是を屈原が山澤彷徨の際各所の廟宇祠堂に書せる呵問の辭なりと論定し、文義の次序なきは後の楚人が次第なき纂輯に基くが故なりとせり。

而して後の洪興祖（楚辭補註）、朱子（楚辭集註）（註）、戴震（屈賦註）等相次いで此の説を承けたるが如くなりしも、臆して清の林西仲は之を破して、「……看來只是一氣到底、序次甚明、未嘗重複、亦未曾倒置、無疑可闕、亦無謬可闕。世豈有題壁之文能妥確不易若此者乎。」（楚辭燈）と述べ、屈子が比喩を設けて其の意を寫したるの文詞となし、陳本禮は

「此屈子題圖之作、非渺茫問天詞也。」（屈辭精義）と言ひて、屈原が一腔忠憤の念の寄託すべきものなかりしが故に諸圖を按じて之に題して褒貶の意を寫したるを後人の排纂したるものとなせり。而して王夫之も亦「篇內事雖雜舉、而自天地山川、次及人事、追述往古、終之以楚先、未嘗無次序存焉。固原所自作綴以成章者。逸謂書壁而問非其實矣。」（楚辭通釋）と論じて王逸説を斥けつゝ更に「統一篇而繫之以曰、則原所自撰成章可知。」とて屈子自撰の一證を提示せり。然れども此等の所説未だ必ずしも吾人の疑念を解消せしむるに至らず。是に於てか近く彼の胡適は一步を進めて、

「天問文理不通、見解卑陋、全無文學價值、我們可斷定此篇爲後人雜湊起來的」（胡適文存二集、讀楚辭）と論斷し、天問を楚辭中より抹殺せんとさへ試みぬ。然れども此亦極端に馳せて中正を失ひたるものにて、忽ち陸侃如及び徐旭生の駁論は表れぬ。即ち侃如は曰へり、「至於文理的不通、我們現在還不能斷定、至多只說他費解罷了。這種費解大半由於我們學識的狹陋。如該乘季德與恒乘季德二句、二千年來讀者、誰也不能下一句滿意的注釋。自近人王國維考得該恒二人都是商代遠祖後、意義方略可通。依此推測下來、天問的意義、將來或可明瞭之一日。……」（努力讀書雜誌第四期所載、讀楚辭）と。徐旭生又曰へり。「凡後人仿作的文章、差不多總具有下列兩條的。第一、後人所作的東西、大約形式比較清楚、思想比較明白。比方卜居漁父等篇、形式完備的多、很容易看得出是楚辭進步已高時期的作品。在這一方面、無論什麼人不能說天問是這樣的。第二、如果形式不分明、那就是有意的摹古、這篇前無古人、後無來者的天問、我們說他不是摹仿、大約不會錯的。這兩個條件全不能範圍着他、所以我們沒有滿足的理由、說他是後人仿作。」（同上、天問釋疑）と。論述甚だ詳かなりと雖も、是を以て必ずしも屈子の自撰と爲すべからず。況んや、天問を以て屈子の作と斷ずるは抑々その基く處史記の文にあるに於てをや。即ち太史公早く「余讀離騷・天問・招魂・哀郢、悲其志。」（史記、屈原賈生列傳贊）といひて、天問を屈子の自作と爲せしより、自撰他撰には論あれども、多く之を屈子の所作と爲すに至りたるなり。然れども史記の文悉く據るべからざるは、漁父、盜跖、佞僂の諸篇を紊りに莊子の作と爲せし一例に依りても察し得べし。かくて吾人の疑念は繼ぎ起りて其の止まる所を知らざるに似たり。

(註) 尤も朱子は王逸説に凡べて贊意を表したるものに非ず、「此篇所問、雖或怪妄、然其理之可推、事之可鑿者、尙多有之。而舊注之説、徒以多識異聞爲功、不復能知其所以問之本意、與今日所以對之明法。」と述べて一部を斥くる所ありたり。

二

扱上述の疑問を解決せんが爲、茲みに先づ天問と他篇との對比を示さん。

(天問)

曰、
遂古之初、
誰傳道之。
上下未形、
何由考之。
冥昭瞢闇、
誰能極之。
馮翼惟像、
何以識之。」

(離騷)

帝高陽之苗裔兮、
朕皇考曰伯庸、
攝提貞于孟陬兮、
惟庚寅吾以降、
皇覽揆余初度兮、
肇錫余以嘉名、
名余曰正則兮、
字余曰靈均。」

(惜誦)

惜誦以致愍兮、
發憤以抒情、
所作忠而言之兮、
指蒼天以爲正、
令五帝以折中兮、
戒六神與嚮服、
俾山川以備御兮、
命咎繇使聽直。

かくて形式上より直に感得せらるゝ差違は、離騷九章等の多く六言句七言句なるに對し、天問の殆ど四言句なること其の第一にして、句末に於ける「兮」字の有無其の第二なり。而も又全篇を通じての用韻法も相類せざるが如し。是形武上、天問の屈原作たるを疑はざるを得ざるの點なり。茲に吾人は進みて其の内容を検討すべきの必要に迫られぬ。「曰」の一字を冒頭として始まる天問一篇の中には、凡そ百七十二種の疑問を提出せること既に黃維章の言へるが如

し。(註、1)而も此の數多の疑問は或は自然現象に對し、或は神話傳説等に關するものなれば、此等を類に従ひて區分せば凡そ次の七項に收めらるべし。(註、2)

(甲) 自然界に對する疑問、

- 1 天地の開闢に關す、
- 2 造化の主宰に關す、
- 3 宇宙の形狀に關す、
- 4 宇宙の範圍に關す、
- 5 自然神話に關す、

(乙) 人生に對する疑問

- 1 人文神話及び傳説に關す、
- 2 歴史的説話に關す
- 3 天命に關す、

かく分類なせばとて、固より各々の疑問間截然と區別せられたるものにあらず。或は歴史的説話に關する疑問中に自然現象に關する疑問介在し、或は神話と史實とに關する疑問錯出し、特に歴史的説話に關しては時代の先後を顧慮せずして、或は啓・益の堯・舜に先立つあり、或は文・武の昭・穆に後るゝありて、文義の序次なきやを疑はしむるものあるなり。されば陳鐘凡は之を以て一人の手に成りたるものに非ずして數人の手で出でたるものと爲し、得るに従ひて篇を成したるものとしぬ。即ち解して曰く「若此種種疑問、凡一百八十餘則、豈屈子文人所能設想。其爲南國諸哲人歷世研究次第提出之問題、實無可疑。」(楚辭各篇作者考)と。

(註、1) 屈辭精義引用の語に依る。

(註、2) 徐旭生(天問釋疑)、陳鐘凡(楚辭各篇作者考)、陸侃如(中國詩史、卷上)等の說に依る處あり。

三

何れの國たるを問はず、文化の未だ開けざる上古の人民は自然現象の思議すべからざるに對し無限の驚異を懷きたるべきは最も推定し易き所なり。而も此の限無き驚異の念は、或は素朴的なる宗教心と密に連り、或は空想的なる好奇心と

混じて、一種神祕なる世界觀を形成し、彼等の逢著せる凡ゆる自然界の現象事象を以て悉く一種の靈力を包藏せるものと爲すに至りぬ。自然神話の發生過程をかくの如く考ふれば、天問に提出せられたる自然界に對する疑問も恐らくは、古代人一般の世界觀より生じたるものと爲し得べく、人生に關する疑問も亦上古未開民族一般の傳承とも稱し得べし。果して然らば、天問の冒頭に「曰」と記せしは、編者自らの謂には非ずして寧ろ廣く「世に曰く」或は「世人曰く」の意にも解すべし。況んや天問の神話傳説中他の古典籍と相出入するもの多きに於てをや。即ち試みに一例を擧ぐれば

1 玄鳥のことは詩經（商頌玄鳥篇）に見え、

2 羲和のことは書經（堯典）、山海經に見え、（離騷にも見ゆ）、

3 穆王のことは穆天子傳、列子（周穆王篇）に見え、

4 應龍・燭龍・靈蛇等のことは山海經に見ゆるの外

左傳、國語・淮南子等にも類似の説話の採録せられたるを見るなり。

是に於てか、天問篇の成立は問題となりて、朱子は山海經を以て天問に基くものなりと爲し、（註、1）四川の廖平は天問を以て山海經・淮南子より出でたるものとなしぬ。（註、2）然れども余は今此の問題の解決を暫く措きて斯くの如き諸書の採録は反つて民間傳承の廣汎なる流布を示唆せるものと假定せんとす。而して是れ神田喜一郎氏が、山海經は一時の製作に非ず、戰國以來秦漢時代に互り數回に附益せられたるものにして、其の本質は個人的意識に依る假構に非ず、上古以來の民族的傳統に基くものなるを明かにせられたる論述に依りても察し得る處なり。（註、3）

然らば天問の名義は果して如何。之に關しては王逸夙に「問天」を倒置せるものとなし、（註、4）柳宗元亦斯く解して「天對」一篇を作りて「天問」の疑問に對へぬ。然れども洪興祖は柳宗元を以て其の旨を失へるものとなし、反つて其の發生に著眼して、「蓋曰、遂古以來、天地事物之變、不可勝窮。欲付之無言乎、而耳目所接、有感於吾心者、不可不發也。欲其道其所以然乎、而天地變化、豈思慮智識之所能究哉。」（楚辭補注）と述べぬ。嚮に擧げたるが如く寔に

天問は自然界及び人間界に於ける幾多の素朴なる疑問に満たされたるものなれど、固より天に向ひて解答を求めたるものに非ずして寧ろ驚異の叫、咏嘆の發露と見るべく、従つて「天問」は「天に對する疑問」の意にして、「天」とは自然或は宇宙の意と見るべし。

而も篇中一言の屈子の事蹟に涉るなく、忠愛の情の汲むべきなきは、元來天問の屈原と關聯なき傍證にして、爲に王逸が之を屈原放逐後の作と論ぜしに拘はらず、梁啓超、游國恩等（註、4）は反つて放逐前の作となし、各々その論證に苦みたるが如し。

かくて余は天問を以て、宛かも神田氏の論定せる山海經の如く、楚國古代人の民族的傳承を後人の輯録せるものと推定し、而も陳鐘凡の如く、一人の手に成りたるものに非ずして後人の附益あるべしと推察す。即ち字法の變あり、句法の變あり、段法の變ありて錯雜不齊なる多様の形式を用ゐたる處後人の手定を認めざるを得ざればなり。（註、5）

（註、1）朱子曰「而以事理言之、則山海之怪妄爲尤甚、以文義言之、則王注之訓詁爲尤疎。洪兼承二誤而又兩失之。且謂屈原多用山海經語。而不知山海實因此書而作。」（楚辭辯證卷下）

（註、2）廖平曰「天問一篇、本言天上人物史事、如佛經之華嚴世界、所用典故、全出山經・淮南、以二書皆天學也。

後人不得其解、乃謂楚之廟堂、畫有神怪諸圖、天問乃據壁圖而作。試問、壁圖者何處得此藍本。甚至謂山經仿天問而作、尤爲本末顛倒矣。」（楚辭講義）

（註、3）支那學第二卷第五號所載「山海經より觀たる支那古代の山嶽崇拜」參照。

（註、4）梁啓超「屈原研究」、游國恩「楚辭概論」等參照。

（註、5）黃維章曰、「通篇一百七十二問、以何字胡字焉字幾字誰字孰字安字爲字法之變。以一句兩問、一句一問、三句一問、四句一問、爲句法之變。以或於所已問者復問焉、或於正論本論中忽然錯綜他語而雜問焉。或復於已問之順序者而逆問焉以此爲段法之變。」

(屈辭精義引用の語)

游國恩曰「篇中雖以四言爲主、但最短的有三言、最長的有七言、又有五言及六言、他們都是四句一韻的、每韻之中除最普通的全爲四言外、其餘的句子、大半參差不齊、錯雜相間。現在歸納起來、共得下列二十例。」(楚辭概論)

四

擬然らば此が成書の年代は如何。今篇中に就きて史傳的說話を窺ふに、堯禹の傳説及び夏殷周各時代の說話以外、魯の莊公、齊の桓公、晋の獻公、吳の闔閭等に關するものあり、楚に於ては、開祖熊繹より熊通、子文、堵敖、子囊等に及びり。子文は成王の令尹にして其の忠は孔子の稱する處となりたるに依りて當時汎く流傳せられたる說話なるを知るべく(註、1) 堵敖は又その境遇を世人に同情せられ(註、2) 子囊は共王に諡せる忠臣として左氏傳に記載せられたり。(註、3) 而して、共王の卒年はB.C. 五六〇年にして又吳王闔閭の郢都を陥れて楚の昭王を出奔せしめたるはB.C. 五〇六年なり。而も天問中此以後の記載なきを以て察すれば、天問は既に春秋末には纂輯せられたるに非ざるやを疑はしめ、稍々下りても戰國初期を過ぐるることなかるべしと推測せらる。果して然らば此等の疑問は屈原以前既に傳へられたるものにして、爲に或は一部屈子の手定を経ざりしやを疑はしむれども其の證の求むべきはなし。かくて天問と山海經とは、最後の關係を有するに非ずして、寧ろ類似せる記事の廣汎なる流傳を示せるものと見るべく、後の淮南子は固より一部之等の書に取る處ありと謂ふべし。

(註、1) 左傳宣公四年參照。

論語云「子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色、舊令尹之政、必以告新令尹何如。子曰、忠矣。仁矣乎。曰未知、焉得仁。」(公冶長篇)

(註、2) 左傳莊公十四年參照。

(註、3) 左傳襄公十三年參照。